

ブラジル通信

製鉄産業：世界の鉄鋼再編とブラジル

高山直巳

昨年10月末、オランダのLNMグループ（世界第2位）と米鉄鋼大手のISGが合併を発表し、これまでトップのArcelor（ルクセンブルグ）を追い抜き、世界最大鉄鋼メーカーMittal Steel（年産6,000万トン）が誕生した。ブラジルの鉄鋼メーカーの世界ランキングは、15位のGerdau（年産1,300万トン）、38位のCSN、48位のCST、50位のUsiminas、57位のCosipaで、ブラジルの粗鋼生産量は合計しても年産3,000万トン余りで、新会社Mittal Steelの半分の規模である。世界の鉄鋼再編にブラジルが無関係でいられるわけではなく、ブラジルに既に進出しているArcelorはじめ、日本勢の新日鉄、JFE、住友金属がブラジル鉄鋼メーカーや鉄鉱石供給大手のリオドセとの合併事業など、南米ビジネスにどう関わっていくかが注目される。

市場アナリストは、BNDES（国家社会経済開発銀行）の鉄鋼大型国家プロジェクトの努力にもかかわらず、国際メジャーによるブラジル企業の買収を予測している。ヨーロッパ企業のArcelor社長のギー・ドレーは、ブラジルではGerdauだけが他社を吸収し成長する可能性があるが、その他の企業は、既に一部出資している企業が有力買収候補となり、

世界の鉄鋼再編にほとんどのブラジル鉄鋼メーカーは吸収されると示唆している。

ブラジル最大手Gerdauの見方

これに対し、ブラジル鉄鋼最大手のGerdauグループの社長、ジョルジ・ジェルダウ・ヨハンピーター氏は異なった見方をしている。「業界の統合はアメリカやヨーロッパのような、遊休施設があり、高率の生産コストの製鉄会社に問題ある国で起きている。ロジスティックコストはますます重要となり、将来的には鉄鉱石の生産に近いところに強力な製鉄会社を持つ企業が生き残る」とブラジルの強みを強調している。同氏はブラジル、オーストラリアとロシアのような国は、この産業の伝統的な国と入れ替わり、国際市場の主役となると見ており、国際的な鉄鋼供給不足の現状、南米ではブラジルとベネズエラが有望だとコメントしている。ラテン・アメリカは鉄鋼の世界生産の6%を占め、ブラジルはその半分を生産している。同氏は各企業が、地域で地位を占めるには、さらなる投資により体質を強化する必要があり、それを怠れば、外国投資家の買収の対象になるとの認識もしている。世界の鉄鋼業界が再編される中で、ブ

ラジルの企業の生き残りの道はどのような形になるのか。その答えはこの10年で示されることになる。

表 1. 世界の鉄鋼大手と鉄鋼生産量 (2004年、単位：百万トン)

1. Mittal Steel	50.0
2. Arcelor	42.8
3. Nippon Steel	31.3
4. JFE	30.2
5. Posco	28.9
6. Baosteel	19.9
7. Corus	19.1
15. Gerdau	13.0
38. CSN	5.3

出所：IISI (国際鉄鋼協会)

世界の粗鋼生産

2005年の世界の粗鋼生産は8.8%の増大が見込まれているが、それだけでは現在の鉄鋼需要に追いつかず、供給不足による値上げは避けられない見通しになっている。表2の通り、各国別の鉄鋼生産量を見た場合、中国の

生産量とその成長ぶり(23.2%増)が顕著である。ブラジルは世界第8位のポジションにあるが、9位のインドとほぼ並んでいる。ブラジルの投資計画を考慮しても、粗鋼生産量は4,400万トンであり、それを実現したとしても1ランク上げるのみに止まる。

表 2. 世界の粗鋼生産 (百万トン)

	2003	2004	変動率 (%)
合計	969.3	1,054.6	8.8
1. 中国	221.1	272.5	23.2
2. 日本	110.5	112.7	2.0
3. アメリカ	93.7	98.5	5.2
4. ロシア	62.7	64.3	2.5
5. 韓国	46.3	47.5	2.6
6. ドイツ	44.8	46.4	3.6
7. ウクライナ	36.9	38.7	4.9
8. ブラジル	31.1	32.9	5.7
9. インド	31.8	32.6	2.7
10. イタリア	26.8	28.3	5.6
その他	263.6	280.2	6.3

2004年の好業績と2005年の継続

ブラジルの製鉄産業の売上は、生産が大幅に増大しなくとも2004年の好決算は2005年も継続するとの見通しが強い。それはIBS（ブラジル製鉄機関）の発表にも裏付けられている。同機関が要約した予測（表3）では、製鉄業界の増収増益の背景には、鉄鋼製品の供給不足に起因する国際価格の値上がり（2000年～2004年で鉄鋼製品は平均300%の値上がり）と、付加価値の高い圧延製品、亜鉛メッキ鋼、ステンレス鋼のシェアが大きくなっており、輸出効率を高めている点がある。但し、

今年は国内需要の増加により、輸出に回る製品が限定的になっていくとの予想がある。さらに国内価格が国際相場に追随することにより、売上増大も期待されている。業界全体が設備投資を拡大すれば、全ての需要に対応できることになるが、それには資本と時間が必要である。現在業界が実質フル稼働で操業しており、生産能力の拡大の投資は2006年にならなければ実を結ばないことから、そのしわ寄せが輸出の減少となって表れてくるのが2005年である。

表3. ブラジルの鉄鋼産業（単位：千トン）

項目別	2003年	2004年	2004年／ 2003年対比 の変動率 (%)	2005年 (予想)	2005年／ 2004年対比 の変動率 (%)
生産	31,147	32,912	5.7	33,605	2.1
国内販売	15,408	17,906	16.2	19,600	9.5
貿易収支	12,435	11,530	▲7.3	11,029	▲4.3
輸出	12,985	12,040	▲7.3	11,629	▲3.4
金額（億ドル）	39	50	28.2	49	▲2.0
輸入	550	510	▲7.3	600	17.6
売上（百万リアル）	35,242	50,436	43.1	63,360	25.6

出所：IBS（ブラジル製鉄機関）

今年も継続する価格の高止まり

ブラジルの製鉄業界は、鉄鋼製品の高騰が続き、業界は好決算を実現した2004年の実績が2005年も繰り返されとの見方が強まっている。Usiminasは、既に本年1月、アジアの造船業界によって引き起こされた厚鋼板の需要の拍車により15%値上げすることを示唆している。当業界の今年の好調な予測は、国内販売に輸入を加えたブラジルの鉄鋼の消費量が、歴史上初めて2,000万トンを上回り、2004

年比9.8%増加するとの予想によって確認されている。需要は土木建設業界と、自動車産業のような伝統的な分野に加え、鉄道や造船産業のような輸送部門を含めた資本財によって弾みをつけている。

国内と海外の需要増大の他に（中国だけで世界の鉄鋼消費の3分の1を占める）、価格が高騰する予測は、大半が石炭、鉄鉱石、コ

ークスと合金鉄のような原材料の値上がりによるものである。石炭の購入契約は、2005年はトン当たり60ドルの現在の水準から、120ドルに達しており、100%の値上りを示している。合金鉄も同じような比率で値上げが予定されている。

鉄鋼業界の投資計画

製鉄部門は2010年までに130億ドルの投資を実行し、その内の25億ドルは2005年に行われる予定になっている。12社の製鉄会社の27の製鉄所における粗鋼の生産能力の拡大計画は、最近IBSによってルーラ大統領に提出されたが、それらがすべて実現されると、現在の3,400万トンの稼働能力が4,400万トンに増加する。拡張プロジェクトのある企業の中には、Companhia Siderúrgica Nacional-CSN (30億ドルのイタグアイーリオデジャネイロ州のスラブ工場建設)、Thyssen/CVRD (22億ドルで年間440万トンの生産能力で、2008年に操業が開始される Companhia Siderúrgica do Atlânticoの建設)、Gerdau (2007年または2008年に操業開始が予定されている、現在の700万トンの生産能力を1,000万トンに拡張するための10億ドルの投資) と、Usiminas (2008年に操業が開始される現在の480万トンの生産能力を680万トンに拡大するため、7億ドル～8億ドルの投資計画がある) などの計画がある。

これらの投資計画が実現すれば、ブラジルは国内市場に対応するため輸出を後回しにしている現在の販売体制から抜け出すことになる。しかし、それにはまだ2～3年の猶予が必要である。製鉄業界の投資は、ブラジルだけではなく、世界の他の地域でも計画されて

おり、そのため一部のアナリストは、国際市場の鉄鋼製品の価格は、まだ今後数年は高止まりが続くものと予想している。

日伯間の鉄鉱石契約

ブラジルの製鉄部門には多くの輸出向けプロジェクトがある。これと並行して国際市場からの鉄鉱石需要も今後数年間は増加傾向を示していくと予想されている。この動きを反映して、最近はリオドセ (Cia.Vale do Rio Doce-CVRD) との鉄鉱石の長期供給契約が相次いでいる。ブラジルの多くの製鉄プロジェクトには、リオドセに出資している企業が鉄鉱石原料を確保するため、リオドセとの契約締結に積極的に動いている。

中国が加熱気味の経済成長を抑えるため、金利を引き上げるなどの引締め策をとっているが、中国がこれまでの内需中心から輸出拡大に動いてくるのは時間の問題とされている。リオドセは、Rio Tinto (豪州) とBHP Billiton (英) と共に“ビッグスリー”を構成する世界最大の鉄鉱石供給企業であることから、世界的な鉄鋼再編の中で長期の大型鉄鉱石供給契約を積極的に取り付けている。

表4に示す通り、リオドセは、4億2,060万トンの鉄鉱石と、1,420万トンのペレットの3年～10年の長期契約の締結を発表している。同社の2004年の推定生産量は、Caemiを除いて1億8,000万トンであり、関連会社を含めると2億2,000万トンである。2005年と2006年分の契約だけで、4,920万トンの鉄鉱石と260万トンのペレットの年間供給が約束されている。リオドセは、すでに長期契約に基づき操業しているが、今後は3年～5年の契約期間が10年に延長される可能性が高く、同社

はその協定に基づいた投資も行っている。

表 4. リオドセが2004年に発表した長期供給契約

企業名	契約(百万トン)	年間供給(百万トン)	期間(年)
鉄鉱石	420.6	49.2	3～10年
Arcelor	120	20	6年
JFE Steel	92	9.2	10年
Corus	75	5 ⁽¹⁾	10年
Nippon Steel	70	7	10年
Usiminas	25	5	5年
Sumitomo	20	2	10年
Shougang	15.3	1.9	8年
Cosipa	3.3	1.1	3
ペレット	14.2	2.6	5～7年
China Steel	4.2	0.6	7年
Nippon Steel	10	2	5年

出所：各企業

(注)(1) 1年目から5年目までは500万トンで、6年目から10年目は1,000万トン。

世界的な消費の増加

長期契約の締結には2つの効果がある。主要な原材料の供給を懸念する鉄鋼製品の生産者には、相場の変動に翻弄されるリスクを逃れ、安定供給が保証される。また鉱山会社にとっても事業計画の開発と、新たな拡張プロジェクトに安定性を与えることになる。中国当局が今年は2億7,000万トンに達する鉄鋼産業の過熱気味の成長を抑える対策を導入し、鉄鉱石の輸入が一時的に激減した際に、買手企業は価格の変動に打撃を受けた過去の経緯がある。

オーストラリアのコンサルタント企業のAME Mineral Economicsは、鉄鉱石の世界消費量は、2003年の13億トンから、2010年には16億6,000万トンに増加すると予測している。中国を筆頭とするアジア勢は、この消

費量の4割を占める。中国は自国産の品質の問題により海外からの鉄鉱石輸入増大を加速化させている。海外からの輸入は2000年の7,000万トンから、2003年には1億4,800万トンに飛躍している。

2004年の輸入は2億トン、すなわち同国の消費総量の40%に達すると推定されている。ブラジルは2010年には、少なくとも3億6,000万トンの生産をすることになる。鉄鉱石の消費が増加した別の要因は技術的なものである。1970年から1990年代の半ばまでは、電力エネルギーとスクラップをふんだんに消費する装置の電炉による製鉄会社が主流だった。しかし、この手法は、その後、スクラップと電力の深刻な不足に直面し、ここ数年間で開発されてきたのは鉄鉱石を高炉で溶解するものである。それは鉄鉱石に対する需要が鉄鋼製品

の生産によって大幅に増加することを意味している。この世界的な需要の増加により、鉄鋼製品の価格はここ12か月間ですでに倍増している。すなわち1年以上前にFOB価格でトン当たり250ドルしていたスラブは、現在500ドルを上回っている（1トンのスラブを生産するため1.5トンの鉄鉱石が使用される）。

リオドセの戦略は輸出に直接関係している。同社は2004年には、輸出を2003年の34億ドルをかなり上回る50億ドル程度に伸ばした。同社の鉱山開発投資が集中しているのはパラ州である。同社が2010年までに計画している85億ドルの投資のうち、55億ドルは鉄鉱石だけではなく、ボーキサイト、銅およびニッケルを含めてパラ州に集中投資されることになっている。

リオドセとJBICが協力関係を確認

昨年リオドセ社長のRoger Agnelli氏は、国際協力銀行（JBIC）を訪れた際、今後の両者の鉱業開発及びインフラ部門の整備に関する協力関係を確認し、今後は開発計画推進のための年次会合を開催していくことを決議した。JBICのブラジル鉄鉱開発融資残高は4億8,500万ドルに及ぶ。これらにはAlunorte、Alubras、Cenibraがあり、さらに物流面では中央アトランチカ鉄道に対する支援融資が含まれている。近年のリオドセと日本勢との協力関係は、90年代に後退した二国間関係を復活させる糸口になることが期待されている。

（たかやま・なおみ ジャパンデスク・インフォメーションサービス、在サンパウロ）

〔ラ米関係文献紹介〕

『マジカル・ラテン・ミステリー・ツアー』

野谷 文昭 五柳書院 2003年12月 446頁 3,200円＋税

ボルヘスやブイグ、マルケスなどの訳者としても知られているラテン・アメリカ、スペイン文学研究者が1993年から2002年の間に書きためた評論、エッセイなどの集大成。スペイン、メキシコとキューバ、アルゼンチンやコロンビア、ペルー、チリの南米に関わる文学論、作家論、書評をはじめ、映画評、音楽談義、インタビューや追悼文に至る広範なテーマが集められている。いずれも長い研究に裏打ちされた見識と造詣によって、短い文章ながら内容は濃い。

ラテン・アメリカ文学に関心があって、ある程度読んでいけば、それら作家や関係者との交流時の対話も含めた著作の紹介は、その奥にあるものを知る上で一層興味深い。文学以外にもアントニオ猪木やアルゼンチン・タンゴ、映画、日本人のラテン・アメリカを絡ませた小説など、多岐な話題を取り上げたエッセイも読ませる。

〔桜井 敏浩〕